The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アブドゥル・ラヒーム・カーンカーナー著『バルヴァイ詩集』 : ムガル廷臣のクリシュナ讃歌
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2014, 13, p. 43-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27069
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アブドゥル・ラヒーム・カーンカーナー著
『バルヴァイ詩集』
―ムガル廷臣のクリシュナ讃歌－

長崎　広子

アブドゥル・ラヒーム・カーンカーナー ‘Abdul Rahīm Khān-e-Khānā (1556-1626) は、ムガル皇帝アクバル (帝位 1556-1605) の宰相の一人であり、次の皇帝ジャハーンギール (帝位 1605-1627) にも仕え、ムガル帝国の支配権の拡大に貢献した人物として、インド史上にその名を刻まれている。こうした政治および軍事的な功績以外に、彼はペルシア詩人たちのパトロンとしても知られ、また自らも類まれな文学の才に恵まれてペルシア語、サンスクリットや古ヒンディー語で華麗な詩を著している。チャガタイ・トルコ語で著されたムガル初代皇帝バーブル (帝位 1526-1530) の回想録『バーブルの書 *Bāburnāma* 』をペルシア語に翻訳した人物でもある。彼の文学は、多言語を巧みに操るその才能の点だけで評価されているわけではない。ラヒームはイスラム教徒でありながらインド古典文学に精通し、自らサンスクリットや古ヒンディー語で華麗な詩を創作しているのである。とりわけ古ヒンディー語によるヒンドゥー教のクリシュナ神を讃える詩は、神への思いのたけを直截に吐露する当時のバクティ文学の中でも高く評価され、作詩法上の技巧面でヒンドゥー教詩人たちにも多大な影響を与えている。彼の著したとされる古ヒンディー詩の写本には年が記されていないことから、テキストの信憑性には検討すべき課題が残されている [1]。だが、ラヒームの詩が今なお絶大な人気を誇り、彼がイスラム教徒のみならずヒンドゥー教徒にも愛される詩人であることに疑いの余地はない。彼がムガル帝国史に名を残すイスラム教徒でありながらヒンドゥー教のバクティ詩人でもあったことは、アクバルが推し進めたイスラム教とヒンドゥー教の融和政策の象徴ととらえるべきなのだろう。

そこで本稿では、ラヒームの歴史上伝えられている生い立ち [2] や政治的功績を概観したうえで、ムガル帝国期のイスラム教徒によるヒンドゥー教文学を鑑賞する目的で、クリシュナ神への牧女の思いを綴ったバルヴァイ詩集を全訳する。

---

[1] Busch 2010, p. 109.

[2] ラヒームについては、『アクバルの書』をはじめとするムガル皇帝記の記載から知ることができるが、本稿では Bhāṭī (1992)と V. Miśr (1985)の記した彼の生い立ちをもとに、その生涯についてまとめた。

波乱万丈の人生

ラヒームの父バイラム・カーン・カーンカーナー Bairam Khān Khān-e-Khānā は、学識と勇敢さによってムガル帝国第二代皇帝フマーユーン(1508-1556)に寵愛され、その息子アクバルの教育係に任ぜられた人物である。血筋はテュルク系で、フマーユーンとアクバルをムガル帝国の皇帝位に就けた立役者であった。ムガル皇帝と婚姻によって血縁関係を築き、複数の妻と結婚していた。中でもサリーム・スルターナー・ベーガム Salīm Sultānā Begam は初代皇帝バーブルの孫娘で、バイラム・カーンが亡くなった後には、皇帝アクバルと再婚した女性である。ラヒームの母はメオ族(Meo) 出身で、アクバルの母方の叔母にあたる。メオ族は、もともとラージャスターン東北部に居住し、イスラム教に改宗したヒンドゥー・ラージプート族で、現在もなおヒンドゥー教のカースト・システムに属しているとみなされる独特の宗教文化を有している。彼らは自らをブラジ地方の牛飼いであったクリシュナ神の末裔と信じており、ラヒームがヒンドゥー教への造詣が深くクリシュナ讃歌を著したことには、この母からの影響があったものと推察される。ラヒームはこのような父と母のもとにラーホールで誕生し、それを祝してアクバル自らバイラム・カーンの家に駆けつけ、ラヒーム（「慈悲深い」）の名を与えたとされる。だが後に、バイラム・カーンはアクバルと意見を異にし反旗を翻そうとしたことが発覚してメッカへの巡礼を命ぜられる。そして巡礼に向かう途中のグジャラートでムヴァールク・カーン・ローハーニーによって攻撃を受けて命を落とす。その時ラヒームはわずか四歳であった。母は息子とともにアーメダバードに逃れてそこで暮らし始めたが、悲報を聞いたアクバルは母子を自らの宮廷のあるアーグラーに呼び寄せて養育したという。ラヒームのチャガタイ・トルコ語、アラビア語、ペルシア語、ウルドゥー語、ヒンディー語、サンスクリットのマルチリンガルな学識は、その時培われたとされている。彼は非常に聡明で、それを高く評価したアクバルは自らの乳母の娘 Māh Bānū と結婚させる。16 歳でアクバルの遠征に同行したことを皮切りにラヒームは数々の軍事的勝利をあげ、中でもグジャラートの戦い、スヘールの戦い、スィンドゥとタットでの勝利が三代功績とされる。当時最高の称号であったミール・アルズ Mīr ‘Arz を 1579 年に授けられた。

アクバルの亡きあと皇帝位についたジャハーンギールも当初はラヒームを重用したが、頂点を極めた彼の名声と栄光にもしだいに陰りが見え始める。ラヒームは妻を失い、前途有望な戦士であった長男と三男を立て続けに失った傷心から、南部での敵の侵入を許し、防衛に苦戦することになる。さらに皇帝ジャハーンギールとその息子シャー・ジャハーンとの確執に巻き込まれ、ラヒームは過酷な運命へと突き進んでいく。地位も財産も没収され、シャー・ジャハーンの大臣であった次男ダラーブ・カーンまでもが投獄された。釈放されてからも、将軍マハーバト・カーンの陰謀でラヒームはジャハーンギールの第二王子パルヴィズの側につくことになり、怒ったシャー・ジャハーンはダラーブ・カーンの息子と甥を殺害する。終には唯一生き残っていた次男ダラーブ・カーンまでもマハーバト・カーンによって殺害され、その首は皿にのせて父ラヒームのもとへスイカと称して届けられたという。

一時期は聖地チットルクートで苦行者のような生活をしたとも言われるが、ラヒームはジャハーンギールによって再度登用される。彼の一族を破滅に導いた宿敵マハーバト・カーンが力を失った後には、その封土が与えられた。だが、ラーホールで病にかかり、そこで亡くなったとも、デリーに向かう途中で亡くなったともいわれる。72 歳であった。

デリーのニザム・ウッディーン駅近くにはフマーユーン廟があるが、その近くにラヒーム・カーンカーナー廟がある。ラヒームが妻のために建てた墓廟であったが、そこに今は妻のそばで彼も眠っている。

ラヒームの著作とバルヴァイ韻律

ラヒームはペルシア語の詩人として鑑文学 *Dīvān* を著し、『バーブルの書』の翻訳者でもあるが、インドの言語による彼の著作では、サンスクリットによる占星術書 *Kheṭa-kautukam* と *Dvātriṃśadyogāvalī*、ヒンドゥー教バクティ詩 *Saṃskṛta-padya* と *Gaṅgāṣṭakam*、古ヒンディー語では、町に暮らす女性像 *Nagara-śobbhā*、バルヴァイ韻律による女性像 *Baravai-nāyikā-bheda*、バルヴァイ詩集 *Baravai*、8 パーダ形式によるクリシュナのラースリーラーを描いた恋愛詩 *Madanāṣṭaka*、ソールター韻律による恋愛詩 *Śṛṅgāra-soraṭha*、ドーハー詩集 *Dohāvalī* に加え、

いくつかの断片的な詩も知られている。

古ヒンディー語による作品では、特にドーハーとバルヴァイ韻律による詩が知られる。ドーハーはプラークリットの時代からインドで好まれてきたマートラー(拍)韻律の二行詩(1 行は 13+11=24 マートラー)であるが、バルヴァイはドーハーをさらにコンパクトにした 1 行 12+7=19 マートラーの二行詩で、ラヒームが考案したとされている。これについては次のような伝説がある[3]。ラヒームの使用人が自らの結婚式のために休暇をもらって帰郷したが、仕事に戻る日に遅れたため、新妻がラヒームに渡すように次の詩を夫に託したという。

prīti rīti kau birvā calehu lagāya.
sīcana kā sudhi lījai murajhi na jāya.
愛のならわしで、木が植えられました。
枯らさないように、水やりに注意を払ってください。

夫を木に喩え、大切に扱ってほしいとの願いが込められたこの詩は、一行 12+7=19 マートラーで行末の 2 音節で_⏑の脚韻をふみ、バルヴァイ韻律で編まれている。この伝説にしたがえば、バルヴァイ韻律はラヒームが考案したものではなく、新妻によるものであることになる。いずれにしろ、この詩を受け取ったラヒームは感銘を受け、この韻律を用いて自らもバルヴァイ詩集を著したとされている。さらに彼のバルヴァイ詩集に感銘を受けたトゥルシーダースがバルヴァイ韻律でラーマーヤナ物語 *Baravai-rāmāyaṇa* を著したという。

トゥルシーダースにバルヴァイ詩をラヒームが送ったという伝説の根拠となっているのは『上人伝 *Gosāīṁ Carita*』であるが、これが実はかなり後代の創作であるとされ[4]、また新妻がラヒームに贈ったという先述のバルヴァイ詩が 18 世紀の詩人ヤショーダーナンダンの詩と同一であることが発見され[5]、現在ではラヒーム

---

[3] V. Miśr 1985, p. 12.

[4] 『上人伝』のテキスト発見とその問題点については、Lutgendorf 1994, pp. 65-85 参照。

[5] ヤショーダーナンダンのバルヴァイ 53 と同一である点につい

のバルヴァイ伝説はおそらくフィクションであったことが明らかになった。しかし、バルヴァイ韻律がラヒームやトゥルシーダース以降の詩人たちに多くは好まれなかったことから、今なおラヒームといえばバルヴァイと言われるほど、この韻律はラヒームと結びつけられている[6]。

本稿で翻訳紹介するラヒームのバルヴァイ詩集は当時ブラジ・バーシャーと並んで文語として用いられていたヒンディー語東部のアワディー方言によるもので、神々への祝祷にはじまり、本編は第 7 番以降である。牧女がクリシュナと離れ離れになった苦しい心のうち(ヴィラハ)を自らの女友だち、あるいはクリシュナの伝言を届けに来たウッダヴァ(ウードー)に語っているが、形式は 12 カ月の季節の情景を盛り込んだバーラハ・マーサーとよばれる民謡に倣っている。雨季の訪れを意味するシュラーワナ月にはじまり、アーシャーラ月(雨季)、バードラ月(太陽暦 8、9 月)、パールグナ月(太陽暦 2、3 月)のホーリー祭まで、黒雲の到来、クジャクの鳴き声等のインド文学で好んで用いられてきたモチーフを詩の中に盛り込むことで、愛しい人と別れた牧女の切ない思いを重層的に表現している。雨季の訪れはクリシュナが容易に移動できない、つまり牧女の前には姿を現さないことを意味する。クリシュナの牧女たちとの戯れ(リーラー)の場であるティージュ祭やホーリー祭にさえクリシュナは現れない。クリシュナの伝言を届けに来たウッダヴァを牧女は責めるが(43, 45-47, 56, 60, 76)、ウッダヴァはあくまで宗教的にクリシュナ神への高尚なバクティ(51)を強調し、それは牧女の恋情には慰めにすらなっていない。

今回の翻訳は、Vidyānivās Miśr 版をもとに、Deśrāj Siṃh Bhāṭī の現代ヒンディー訳の付されたテキストを参考にした。どちらのテキストにも同数の詩が収められているが、不可解なのは、ヒンドゥー教の神々への祝祷から始めたラヒームが詩集の最後を神々への祈りもなしに作品を唐突に終わらせていることである。未完成なのか、まだ発見されていない後半部分があるのか、はたまたばらばらに創作された詩が集められた作品なのか、現時点では推

ては、K. Lāl 2003, pp. 15-16 に詳しい。

[6] ラヒームとトゥルシーダースのバルヴァイ韻律の用法の特徴は、Snell 1994, pp. 373-405 における分析を参照されたい。

測の域を出ないが、このバルヴァイ詩集からはそれが完全な作品ではないとの印象を受ける。特に 102 番の旅人が誰を指すのか、クリシュナとの別れを嘆きながら 103 番の恋人と結ばれた幸福感を表わした詩がなぜ含まれているのかは不明である。

サンスクリット文学の本歌取りともいえる伝統的なテーマがヒンディー固有の短いバルヴァイ韻律で編まれ、語彙は主にタドバヴァが使用されているが、中にはペルシア語の単語を用いて脚韻を踏んでいるものもあり(hazāra-kumāra (42), sarosa-aphasosa (68))、こうした融合こそがラヒーム文学の醍醐味といえよう。なお、86 番と 94 番と 95 番と 96 番の詩は、すべてペルシア語で著されている。ペルシア語でも韻律はバルヴァイ韻律に倣っており、ラヒームはペルシア語でバルヴァイ韻律の詩が編めることを示したかったのではなかろうか。

訳出にあたっては、特にペルシア語の詩において、北田信氏より並々ならぬご助言をいただいたことを、この場を借りてお礼申し上げる。

バルヴァイ詩集[7]

1.障害を滅する方、繁栄と成就の主。汚れのない知恵を照らす方。額に月を抱く幼児(ガネーシャ神)に敬礼したてまつる。
2.心を堅くして、ヴリシャバーヌの娘(ラーダー)の命のよりどころであるナンダの息子(クリシュナ神)を想念したてまつる。
3.生物・無生物の主。哀れな者に幸福を与えてくださる方、救ってくださる太陽神に敬礼したてまつる。
4.悩みを解き放ち、山の娘(パールヴァティー神妃)の主であり、都市に住む者を維持する方であり、三つの目を有し、ガンジス河を額にいただく方(シヴァ神)を念想したてまつる。
5.災いを滅する方、風神の息子、卑しい悪魔の森を焼いた方、ラーマ神にとって愛しい方(ハヌマーン神)を念想したてまつる。
6.その光によって心の闇が取り除かれる師(グル)の蓮の御足に、幾度も幾度も敬礼したてまつる。

7.ナンダの息子よ、黒雲がたちこめ、轟き、くじゃくが騒ぎ、芽も伸び始める。

8.雲があたり一面にどしゃぶりの雨を降らせる。シュラーワナ月(=雨季)が訪れた、ナンダの息子よ。

9.友よ、今日もガナシュヤーマ(雲のように黒い方=クリシュナ)は気にかけて来てはくれなかった。誰か女がどこかに住まわせて隠したのか。

10.友よ、いつまで堪えられようか。シュラーワナ月になっても来ない。力強き勇者(クリシュナ)はいったいどこに？

11.雲が一面にたちこめ、稲妻が光る。シュラーワナ月のティージ

[7] 詩集内のヒンドゥー教神話の用語については、日本で一般に用いられているサンスクリットに準じたカタカナ表記を採用した。

ュ祭[8]で、愛する人も愛される人もいっしょに[ブランコに]揺れる。

12.真夜中に意地悪なチャータカ鳥は「愛しい愛しい」[9]と啼き、愛しい人と別れた女の心を苦しめる。

13.よき人シュヤーマ(黒い方=クリシュナ)はシュラーワナ月に来ると言って、今日も来なかった。友よ、魂がもだえ苦しむ。

14.モーハナ(魅了する方=クリシュナ)よ、どうかここに来て私の意識を奪っておくれ。愛しい方よ、あなたなしには昼も夜ももだえ苦しむ。

15.日ごとに切望が四倍に膨れ上がる。マナモーハナ(心を魅了する方)に会う方法を教えておくれ、友よ。

16.マナモーハナを見なければ、その日は楽しくない。友よ、あの方の魅力を忘れられない。少しでも会わせておくれ。

17.四方八方にむくむくと雲がたちこめる。シュラーワナ月の日、マナバーワナ(心を魅了する方=クリシュナ)は[恋人に会うために]出掛ける。

18.美しく賢い女は、雲がたちこめると、恋人と別れた女の心が雲の賑わいで燃え上がることを知っている。

19.力強き勇者(クリシュナ)がいなくても、[愛の]新芽は生長する。[愛を成長させる]愛神王の羽根のない矢[10]のように。

---

[8]雨季のシュラーワナ月黒分 3 日に妻が夫の長寿を願って祝われる祭り。ブランコの祭りともいわれ、木にブランコをかけて楽しむ。

[9] チャータカ鳥の鳴き声ピヤーpiyā が「愛しい」あるいは「愛しい人」を意味する同音異義語になっている。

[10] 愛神王の羽のない矢とは、カーマ神の五種の花でできた矢をさ

20.体を溶かし、身を焼くことはできる。真の愛を貫くことは極めて難しい[11]。

21.マナモーハナよ、あなたの[美しい]姿は私を喜ばせない。やって来なくても、私の前に考え(想像)となってすべてが現れる。

22.あたり一面に雲がたちこめ、雨が降るにつれ、恋人なしには、この身は苦しみ悶える。

23.ハリ(クリシュナ)は毎日[私だけを愛していると]偽りの約束をする。だが会えば、苦しまぎれの返答をする。

24.心地よく、愛おしい、三重の(やさしく、冷たく、芳しい)[12]そよ風が吹いても、ハリがいなければ、友よ、それはまるで刃のよう。

25.旅人よ、伝言を届けておくれ[13]、あの方の足にすがって。モーハナよ、あなたなしには一瞬たりとも生きられないと。

26.友よ、アーシャーラ月が来てから、あの女の心の苦難が分かる、友よ。

27.マナモーハナなしには、女の心の悲しみは増す。ナンダの息子よ、アーシャーラ月になるとすぐに来ておくれ[14]。

すものと解釈できる。

[11] 19 番に続き、愛神カーマの、シヴァの第三の目の炎に焼かれて灰になったという神話を踏まえた詩と思われる。

[12]Bhāṭī 1992, p. 255.

[13]旅人に伝言を届けさせようとするこのモチーフは、カーリダーサの『雲の使者 *Meghadūta*』の写し、あるいは伝統を汲んだものといえる。

[14] 校訂本では動詞が完了形の āyau になっているが、クリシュナは現れていないことから、内容を重視して、V. Miśr 版の異読の āye を訳出上採用した。

28.ヴェーダやプラーナはあなたが罪人を救う方と語る。慈悲の海(クリシュナ)よ、どの理由で [私に慈悲をかけるかどうかを] 考えるのか？

29.アーシャーラ月になるとすぐに来ると言うのか、青年(クリシュナ)よ。四方に雲がたちこめ、孔雀が啼く。

30.友よ、雨季に愛しい人が他国にいるのを見て、[愛神が]弱き女にめがけてインドラの弓を引いた(=虹をかけた)。

31.友よ、別離[の苦しみ]は四肢に広がり、悪評がたった。ナンダの息子は残酷なことをして、何と卑怯な手を打つのか。

32.この一生をかけてどこに逃げなかったか。何度も行かなかった地があろうか。この身の影と運命はいつも離れない。

33.ああ心よ、災厄をとり除いて下さる方、牛飼女の心を喜ばせる方、最も慈悲深い方であるナンダの息子に仕えよ。

34.友よ、何十万もの人々が暮らしていても、ハリなしに、この心はどこで喜びを得られようか。

35.たとえ願いどおりに大地が水で潤されても、スヴァーティ宿の雨滴がなければチャータカ鳥は渇きで死ぬ [15]。

36.一目見たいと昼も夜もこの身はもがき苦しむ。悪魔マドゥを滅ぼした者(クリシュナ)よ、これこそが完全な愛なのです。

37.友よ、いつから見続けているのか。雨が降る。登った屋上で気にも留めずに、愛(油)に濡れながら [16]。

---

[15] スヴァーティはインド 27 宿星における第 15 番。雨水でしか生きられないチャータカ鳥は、最も純粋とされるこの星が輝く雨期の水を渇望する。

[16] Bhāṭī 1992, p. 257 によれば、この詩は saneha の掛け言葉にな

38.別れの苦しみで枯れて死ぬと[運命に]書かれている。もし命の根幹モーハナに会えなければ。

39.ウードー(ウッダヴァ)よ、その人のいないところで何か言うのはよろしくない。正しい人も嘘つきになり、真実も嘘になる。

40.バードラ月の夜は闇。家の中も闇。熟練の旅人も[恋人が待つ]シヴァ寺院を見失う。

41.友よ、[眼にすれば汚れるという]バードラ月白分 4 日の月を私は眺めよう。ハリによって[この身が]どのように汚れるのか、見てみよう。

42.こんなことを何千回言おうとも、どうにもならない。ナンダの息子は誰にでも笑って話す。

43.なんとずるいことをするのか、ウードーよ、信じさせておきながら。夢の中でも愛しいモーハナを忘れられないのに。

44.ナンダの息子と別れると、森、林、山、川はどこまでも容赦なくなり、火のように燃える。

45.一晩中来ずに[いまさら]姿を見せるとは、なんとすばらしい！私がこの身を捧げているのに、どうして[いまさら]来られたのか？

46.初めからこの世の関わりはすべて失っている。ウードーよ、今は救いであったそれ(クリシュナの愛)さえもない。

47.昼も夜も別れという呪いに囚われている。モーハナのあの言葉！ウードーよ、ああ。

っており、二重の意味で解釈できるという。saneha を愛と油の二通りの意味にとると、裏の訳は「身体に油を塗った人は、水に濡れても気にやまない」となる。

48.男女が発情しても驚くことではない。驚くべきは、パールグナ月に樹木までが裸になることだ。

49.思わず笑ってしまう話しをしても、悪評をたてられる。友よ、モーハナに少し教えてあげておくれ。

50. 840 万回[生を受けて得られる]人の身のように、この世で純粋な愛は得難い。

51.[ウードーは語る。] 極めて得難い人の身を[あなたは]容易に手に入れた。それゆえハリを讃え、真実の人々と交わるように、知らせて語った。

52.モーハナの身体は極めて驚くべき美の海。友よ、それを見ると、たちまち目という蓮[17]は[涙の海に]溺れる。

53.とても無情で嘘つきな[クリシュナの]黒い身体。なぜ心に突き刺さっているのか分からない。

54.見ずしては、この目は落ち着かない。ああよき人(クリシュナ)よ、一瞬一瞬が劫のように[緩慢に]過ぎる。

55.モーハナよ、何度も偽りの約束をする。愛しい方よ、こんなずるい話をあなたはするのか。

56.ウードーよ、モーハナはブラジの住人の命の活力。この伝言[18]は語るべきではない話。

---

[17] 目は蓮の花びらに形状が似ているため、水がなければ生きていけない蓮に目を喩えている。クリシュナの美しさを見て「涙ぐむこと」を「蓮(=目)に潤いを与える」と表現している。

[18] クリシュナが来られない時に、友人ウッダヴァ(ウードー)は彼の伝言を携えてやって来て、ニルグナの宇宙原理に関する宗教的解釈を語る。

57.愛する人と別れてから、一瞬たりとも心地よくない。[私の]蓮の目は一瞬ごとに涙があふれて恋をする。

58.教えておくれ、愛しい人と別れてから、どんな安らぎがあるというのか。胸は溜息で、目は涙であふれる。

59.[愛しい人が]遠くに住んで、友よ、人はどうして生きられようか。わずかな距離さえ耐えられないのに。

60.ウードーよ、「[クリシュナが来る]時を告げたら、行くように」と言っても、[それまでの]時は[クリシュナと離れている]時のように耐えがたく見える。

61.この一片[の心]で[クリシュナと]ひとつになるとは語れない。[クリシュナについて]聞くと、たちまち心が無数の欠片となる。

62.友よ、ハリは少し笑って[私を]見て行ってしまった。その時から愛の火は炎となって燃え上がった。

63.友よ、モーハナが[他の女に]笑いかけて話すことは、心を堅くしてみても、気に入らない。

64.友よ、男も女もいっしょにホーリーを祈っている。[色粉で山火事のように赤く染まったホーリー祭に]ハリがいなければ、心に山火事が燃え上がるかのよう。

65.四方八方に郭公(カッコウ)の鳴き声が響くにつれて、胸のうちの痛みは激しくなる。

66.モーハナが去ってから、何も感じられない。[会いたい一心で]意識は瞼にとどまり、目は道に釘付け。

67.友よ、ナンダの息子と別れてから、毎日毎日私の心はつま先立ちして、戸口を見つめる。

68.友よ、ハリを見なければ落ち着かず、怒りがこみ上げる。近くに住んでいても会えなければ、それは悲しい。

69.ずるい方よ、憐れんですぐに来て会っておくれ。見なければ、昼も夜ももがき苦しんでしまう。

70.あなたがすべてにおいて賢い、これはすばらしいこと。だがホーリーのような祭で実家に帰るとは [愚かなこと][19]。

71.ハリよ、他に何を言うべきか？この愛こそがすばらしい。一目会いたいと昼も夜もこの身は焦がれる。

72.モーハナが去ってから、空腹も喉の乾きも感じない。何度も何度も深いため息が広がる。

73.胸の奥を射て、魂を貫く。毒のように、何にもまして最強の矢である[クリシュナの]眼差しは。

74.暗い路地で会うと、黙ったまま、マナモーハナは力いっぱい抱きしめた。

75.姑、小姑、師、町の人々は怒る。モーハナまでが[私をおいて]こうして行ってしまった、ああ友よ、ああ。

76.あのお方がいなければ、誰が愛の名誉を守るのかと、ウードーよ、あなたが有難きブラジの王(クリシュナ)に、どうか言っておくれ。

77.その方のことで、世間に太鼓が鳴り響いた(=クリシュナを愛したことが世間に大っぴらになった)のに、その方と話さぬことが、利口だというのか。

---

[19] 語り手の牧女が、普段は賢いふるまいで知られる女友達に、恋人同士が仲むつまじく祝うホーリー祭の時にあわせて里帰りするのは、賢明とはいえないと語っている。

78.心よ、分け隔てなく人の痛みを取り除いて下さる方、聖なるバラヴィーラ(力強き勇者=クリシュナ)を昼も夜も讃えよ。

79.愛しい人と別れた女に皆が言う、今は泣くなと。他人の痛みを知った時に、言っておくれ。

80.皆が言う、ハリと別れた時には心を強く持てと。愚かな石女(うまずめ)は陣痛の苦しみを知らない(=恋をしたことのない者は別離の苦しみは分からない)。

81.モーハナの竹笛(バンスィー)を見ると、それは釣針(バンスィー)のように思える[20]。最初は甘い音色に感じられても、胸に突き刺さる。

82.何千万の努力をしても、運命の決まり事を覆せはしない。鴨のつがいが籠の中で、声を聞いても顔を背けるように[21]。

83.欲しいと思わずとも、きれいだと見ると人は尋ねる。商人よ、白小麦粉[22]をいくらの値段で売っているのだい？

84.カーンハ(黒いお方＝クリシュナ)について何を語ろうか。全世界は知っている。何者で、誰のものか[を気にも留めずに]、せむし女[23]を救済したことを。

85.[友よ、]むら気なハリを盗んだために、あなたはふたつの心を持っている(=恋煩いをしている)ように見える。

---

[20] Baṃsī の同音異義語(竹笛と釣針)による掛け言葉。
[21] チャクワーと呼ばれる鴨(アカツクシガモ)はつがい間の愛情が深いことで知られるが、夜は常に別々に過ごすという。
[22] 全粒粉が一般である日常生活において、真っ白い小麦は贅沢品であるが、この一節では手が届かないと分かっていても思わず欲しくなる美しいものの比喩として用いられている。
[23] クリシュナの宿敵カンサ王の侍女。クリシュナを愛して、彼によって救済された。

86.愛しい人なしには、この心の一瞬一瞬は、千年の時のように過ぎる。

87.若い女の足に触れて、花を咲かせた無憂樹[24]が、憂いを消し去ることは、驚くべきことか。

88.蜂と郭公のこの愛の習性[25]を理解し、聞いておくれ、友よ。シュヤーマの愛をどうして信用できようか？

89.王であろうと遊行者であろうと皆が知っている、風が[必要で]あることを。ハリは伝言によって、[愛の]つながりを保つ。

90.命持てるものにとって愛しいモーハナよ、なんという愛し方をしたのか。この目という魚[26]は[あなたがいなければ、水の外に出されたように]見たいともがき苦しむ。

91.心よ、シーターの夫、ラグ族の主であるラーマ、苦しむ人々の救済者、悲しみを取り除く方、コーサラ国の主に仕えよ[27]。

92.無駄口はやめて、ナラハリ・ナーラーヤナに仕えよ。柱から顕れ、プラフラーダを救われた方[28]。

93.牝牛の埃と群れの中で、聖なるブラジの月(クリシュナ)を守護せよ。稲妻のように女たちが見つめる、明るい光。

---

[24] 触れたものの憂いを消し去るとされる樹。

[25] 蜂は蓮の咲いている間は飛び回り、郭公は春に啼くことを愛の習性と言う一方で、クリシュナが牛飼い女たちの間を彷徨い、あちこちで愛を語ることを彼の愛の習性と揶揄している。

[26] インド文学で伝統的に用いられてきた比喩表現。形が似ていることから、目が魚と喩えられる。

[27] ヴィシュヌの化身ラーマを称賛した一節。

[28] 自らの敬虔な信者プラフラーダを救うために、ヴィシュヌ神が柱からナラシンハとなって顕れた神話。ここではクリシュナではなく、同じくヴィシュヌの化身ナラシンハ(ナラハリ・ナーラーヤナ)を称賛している。

94.世間が酒に何千回と酔っても、愛しい人なしで、どのようにして私の心は平静を得るだろうか。

95.愛しい人は、私の心臓めがけて眼差しの矢を射た。その時から、苦しむ心は一呼吸ごとにため息をもらす。

96.絵のように美しい人の前で[私の]状態をどのように言おうか、独りでは現れないのに。[私の]心は無力。

97.男も女も仲むつまじくホーリーを楽しむ。私は毎日カラスを飛ばす[29]しかない。

98.シュヤーマと少し知り合いになった時から、私の心には皆が敵、小姑や義姉も。

99.利口だと言ったところで、[私はクリシュナを]見なければ、動転する。友よ、恋をして、幸せを掴んだ者などいるか。

100.月よ、愛の精髄は愛しい人。目というイワシャコは一目会いたいともがく[30]。

101.皆が確信を持って語る。目はすべてを見ると。だがこの世で真の愛は[見え]ない、郭公[が雲を想う愛][31]をのぞいて。

102.旅人が水汲み場を見つけて言った。「飲ませてくれ」
[うっとりした牧女は言った。]義姉よ[32]、足下にひれ伏そう、[旅人にあの言葉を]もう一度言わせておくれ。

---

[29] 愛しい人が来るかどうかを占う習慣。カラスが飛べば、恋人が来る、飛ばなければ来ないを意味する。
[30]イワシャコは恋した月をいつも眺めているとされ、インド文学では恋情を表わす際に題材として極めて好まれてきた。
[31] 郭公は常に雲に恋していると言われる。
[32] 原文では、夫の姉妹 nanada が用いられており、年上か年下かは不明である。何かを頼む対象として、より躊躇するであろう義理の姉として訳出した。

103.手の燃料[33]が燃え、火が残った。寄り添ううちに、家路を忘れた。

104.[愛しい人の]他の女を見て、額に怒りをあらわにしてはならない。最高神は愛神(カーマ)の美しさを[おまえに]与えたのだから、同様の恩恵を獲得せよ(＝愛神のごとく、自らの美貌で恋人を魅了せよ)。

105.[蓮のような美女よ、おまえの]顔に付いたカージャルの印は、蓮にとまる蜂。喩えようのない首飾りをつけた蓮の胸を刺すかのよう。

[33] upariyā 乾燥牛糞の燃料。

追記：本研究は JSPS 科研費 23520429 の助成を受けたものである。

参考文献

Bhāṭī, Deśrāj Siṃh, *Rahīm Granthāvalī*, Delhi: Aśok Prakāśan, 1992.

Busch, Allison, "Riti and Register: Lexical Variation in Courtly Braj Bhasha Texts", In Francesca Orsini ed., *Before the Divide: Hindi and Urdu Literary Culture*, New Delhi: Oriental Blackswan, 2010, 84-120.

Lāl, Kiśorī, Yaśodānandan Racanāvalī, Indore: Manasvī Prakāśan, 2003.

Lutgendorf, Philip A. 1994. "The Quest for the Legendary Tulsīdās." In Winand M. Callewaert and R. Snell (ed.), *According to Tradition: Hagiographical Writing in India*, Wiesbaden: Harrasowitz Verlag, 65-85.

Miśr, Pratāp Kumār, *Khānakhānā Abdurrahīm aur saṃskṛt*, Vārāṇasī: Akhil Bhāratīya Muslim-Saṃskṛt saṃrakṣaṇ evaṃ prāy śodh saṃsthān, 2007.

Miśr, Vidyānivās, *Rahīm granthāvalī*, New Delhi: Vāṇī Prakāśan, 1985.

Snell, R., "'Barvai' Metre in Tulsīdās and Rahīm" in Alan W. Entwistle and F. Mallison (eds.), *Studies in South Asian Devotional Literature*, New Delhi: Manohar, 1994, 373-405.